

# AOVA magazine

カラダのそとがわトうちがわノおはなし・[季刊誌]

vol.0

平成 26年11月20日  
編集／(株)エーワン・アオバ  
無料配布

創刊準備号

## 四つの思い。

各駅停車。

かけがえのない  
いのちとともに。

みずみずしい

暮らしおために。

未来のあなたが  
想像できますか。

木村盛康  
天目茶碗

飛騨高山で魅惑のブルーに  
出逢つてみませんか？

特急や急行に乗ると

その電車がとまらない駅、通過してしまう駅のことも

人はつい忘れてしまいます。

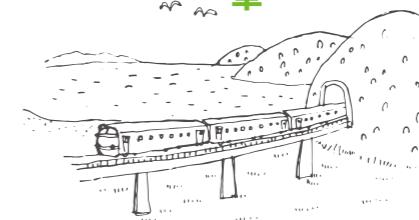
私たちの毎日もきっと同じではないだろうか。

仕事や生活というレールの上を全速力で走るうちに

私たちはいろんな大切なことを忘れてはいる、素通りしている。

そんなことを27年間走り続けてきて、ようやく気がつきました。

## 各駅停車



たとえばアオバのSOD様食品。

この食品は人のカラダにかけがえのない

恵みをくれるもの。

朝の光の中で何気なくいただく一本が、

今日という一日をきちんと生きよう、そう言っている気がするのです。

今日という一日を、家族を愛し、人を敬い、仲間を信じ、

礼儀を忘れず、ていねいに生きる。

私たちアオバは、カラダの健康だけでなく、清潔で節度ある生活や、心の健康までを考えなくてはいけない。

そんなふうに思えてくるのです。

アオバを支えてくれる人たちと一緒に生きることを考えたい。  
28年目の春を迎えるアオバの熱い思いです。

私たちは決して大きな会社ではない。  
でも私たちには、どんな会社にも負けないものがある。

どこにもない経営方針がある。

それは売上げを優先するのではなく、働く人の幸福を優先するという経営である。

それにはどんなときでも私たちは誠実で在り続けなければならぬ。  
そしてどこまでもお客様に対し、一生懸命でなければならない。

いま、こうして私が語っている間も、病と懸命に闘っている人がいる。

その闘いがどんなにひたむきであるのかを知っているから、

アオバのSOD様食品をご紹介できることに誇りが感じられる。

私たちの前には、いつもかけがえのないのちがあります。  
祝福されて生まれ、いつくしみの中で育ち、

夢に胸をふくらませ、しあわせになることを願つて生きるいのち。

まず、私たちは、この地上でもっとも大切なもののために

働いていることを、胸の奥深くに刻み込もう。

そのために、私たちアオバにできることは無限にある。

自分たちを信じよう。自分たちの力を。

自分たちが積み上げてきたものを信じよう。

かけがえのない  
いのちとともに。



私たちはさまざまなかたちで生まれ、さまざまな時間を経て、  
さながら奇跡のように、この仕事、アオバという会社、この仲間に出会った。

そのことを心からよろこび、大切にしよう。

私たちは、ひとりひとりがアオバです。

多くの人は、50代のある日に、ふと気づくのかもしれない。  
あ、私はいま、この人生でいちばん自由な時をすごしている、と。

振り返れば、脇目もふらず、家族のためにけんめいに働いた。

でも、ある日気がつけば、思いがけなく自由な場所に出ていた。  
そこには、何をしてもいい時間があった。

競いあうこともない、奪い合うこともない、勝ち負けのない生活があつた。

おだやかで、のびやかで、  
思いきりおおらかな日々があつた。

自分だけでなく、みんなが健康で幸せであつてほしい。  
自分の家族だけでなく、友人も、知り合いも、  
自分につながる人はもちろん、

つながらない人もしあわせであつてほしい。

そんなことをふつうに願っている自分がいた。

いいな、と思うのです。会社も人と同じように歳をとる。  
やさしさやあたたかさを身につけることができるなら、  
アオバはよろこんで歳をとろうと思うのです。



みずみずしい暮らしを手に入れるために。  
手に余る大きな思いを胸に抱いて、  
2014年10月、新生アオバがスタートしました。

いま、あなたは働き盛りの40代だとします。  
定年のあなたが想像できますか。

元気でしようか。お酒は呑んでいますか。運動は続けていますか。  
しあわせでしようか。

いや、わからないですよね。

人は将来を見通しているつもりでも、何ひとつ確かなことはない。  
ここに、「早めの健康経営」という考え方があります。

これは社員が健康なうちに、病気になりにくいカラダづくりをつくろうという、  
これまでの日本にはなかつた企業が考える「積極的な保健医療の捉え方」です。

私たちがこの考え方を提案するいちばん大きな理由は、  
病気への備えを自分の意志で決める大切さを知っているからです。  
自分で考え、自分で決め、自分の責任で自分の健康を守る。  
そんな社員が増えれば企業の財政も大きく変わってきます。

大切な社員のために。その社員の帰りを待っている家族のために。  
将来を想像することが苦手な私たちだからこそ、  
ぜひ、経営者や社員の方に考えていただきたいのです。



全国にたくさんのネットワークを持つ私たちが、  
「早めの健康経営」を応援することは  
とりもなおさず企業が成長すること。日本という国がよくなること。  
それをどんどん実現してゆきたい。  
そんな思いで、燃えているのです。



# えにしの 人

1

陶芸家

木村盛康

若い方はそうは思わないでしょうが、70年以上も生きていくと、世の中の移り変わりというものには感慨を持ちます。世の中の変わる部分はどう抗つても変わるものは変わっていく。価値観は人がつくったものだけに、どんどん変わる。一切は移ろっていくのです。

その一方で、変わらず貫いているものもある。人の心の中の真実というのはずっと変わらないし、美意識といふものも変わらないのではないか、と私は思うのです。たとえば桜の花の美しさや、紺碧の空。雪を被った富士山なんかはいつの時代でも美しい。こうした人間の奥底が求めているもの、それが本当の「美」ではないでしょうか。学問のある人も、なにかの経験のある人、ない人も、富める人も貧しい人も、あらゆる人に「ああ美しいな」と感動を呼ぶもの。そういうものがあれば、それは人間にとつて宝ともいえるでしょう。

私ごときではどんなに努力をしても作家になることは不可能ですが、その宝を多くの方に見てもらうという願いは私でも叶えることができます。といつて飛驒高山の大きな美術館で、京都の作家の方の作陶展を開催するなんてことは、思ったより容易ではありません。作家の木村盛康先生との縁、光ミュージアムとの縁、そして裏で支えてくれた多くのスタッフの縁が結びあってこそ実現するのです。思えばそれは奇跡みたいなものです。

ぜひ機会があつたら美術館に足を運んでください。そして作品の美しさに惹きつけられてください。さらにできればアオバがなぜ、文化に熱い思いを寄せるのか、その一端を感じただければうれしいです。〔白井常雄〕

# AOVA magazine

カラダのそがわトウチガワノおはなし・季刊誌

日本の大人は楽しそうな顔をしていない。  
そう感じたことってありませんか。

こんな豊かな国に生まれ、きれいな服を身に着け、  
おいしいものを食べ、空調のきいた部屋に住んでいるのに、  
ちっとも楽しそうに見えない。

そう感じるとき、いつも行きあたるひとつの思いがあります。  
私たち大人の半が自分の好きな人生を生きていなかからではないか。

50歳を越えたたら自由に生きてもかまわない。  
それはひたむきに暮らしてきた歳月を思えば、  
当然の資格であり権利だと思うのです。

小さい時からの夢。胸の奥深くに温めていたこと。  
最近思いがけなく心を動かされたもの。何でもいいのです。  
いちばん大切なのは人生はこれからなんだと気づくこと。  
そう思いませんか。  
楽しそうな顔が苦手な私たちだからこそ、  
この一冊をみんなに読んでほしいのです。

平成27年新春、新しいマガジンを、  
アオバが季刊でお届けします。



# 天目は予測が立てられない人生と同じ

木村盛康



かつて陶芸作家の腱鞘炎を癒した  
アオバのSOD様食品。  
えにしの人と呼ぶにふさわしい  
出会いがそこには  
ありました。

妖艶で神秘的な美しさに魅せられて

Japanese Tea Bowls  
Tenmoku of Kimura Moriyasu

千利休は日常のなにげない食器や祭器に「わびの美」を見いだし、茶道具にそれを見立てた。それまでは曜変や油滴とよばれる宝石のような天目茶碗は身分ある人のあいだで格式あるものとして愛用されていた。しかし「わび茶」という意識によって器や花、そして点前や茶室が大きく変わってしまった。

使っているうちに色が変わり、味が増してくる貫入は、茶碗の景色に豊かさを生み、わびの美をかもし出しが、天目茶碗にそれを求めようとするともうかなり大変なのである。使って使って、これでもかというほど使い切らないとわびの美しさはにじみ出でこない。それだけに奥が深いといえる。私の天目は絵でいえば抽象画。見る人に「わあ、きれい。ああ、素晴らしい」と感じてもらえればうれしい。

上賀茂神社に禊川という川が流れていて、文字通り身を清める川。葵祭りの主役、「斎王代」に出られる方なんかは、この禊川で身を清められる。

川の水面を透過した光が砂にあたって、光の色がそれこそ宝石のようにキラキラと輝いている。そんな景色を器から宮司さんが思い描いてくれた。そこから天目禊という名前の器が生まれた。

碗の線や模様から、山だつたり川だつたり、風に揺れる梢であつたりと、色々な風景イメージが湧いてくるような器をめざしたいのだが、そこには独創性が求められる。ユニークで、ほかには似たようなものがないということが問われる。

その独創性に価値を見いだし、お金を払ってでも買つてただける魅力があるのかどうか。つきつめていけば、プロはそこをめざすしかない。

天目の道は技術が複雑多岐にわたっている上に、窯からだしても嫁に出せる作品が少ないときている。だから誰もが敬遠する。いちどは曜変や油滴に惹かれてやってみるとんだが、これは難しいとあきらめてしまう人が多い。

天目はそうそう簡単に手に入る美ではない。つねに裏切られる。天目は予測が立てられない人生と同じで、なりゆきまかせ。私はそれがおもしろくて、いまだやめられずにつきあっている。





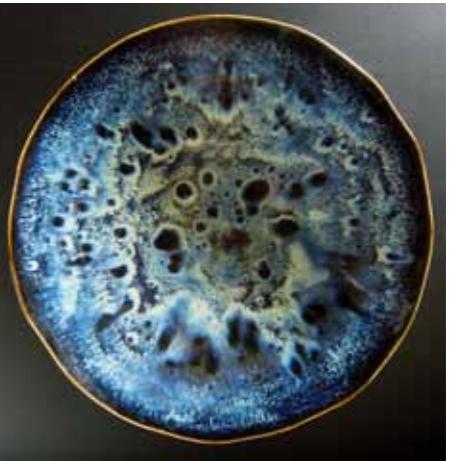
木村盛康氏の特長になっている窯変（よ  
うへん）は銅、錫、チタン、マンガン、  
コバルト、クロムなどのさまざまな鉱石  
による釉薬がの炎によって変化し、焼成  
した陶器に予測のつかない偶然性によつ  
て、妖しい釉色や釉相が表れてくること  
を言います。15世紀頃、わが国の茶人は、  
この瑠璃色に輝く光を「星」または「輝  
く」という意味をもつ「曜」の字を当て、  
曜変と文献に記するようになりました。

（木村盛康氏は耀の字を使用しています）  
焼成温度・釉薬の厚さ・素地・窯により、  
奥行きのある変化を醸し出す景色はそれ  
こそ無限にあるのですが、木村盛康氏は  
化学反応をある程度予測しながら、魅力  
ある天目を次々と生み出しています。

Japanese Tea Bowls  
Tenmoku of Kimura Moriyasu



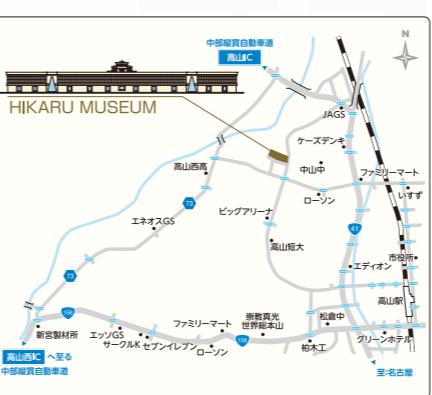
先生がこの時のために焼  
かれた茶碗でお抹茶を頂  
く。作品を手にし、唇に  
触れ、まじまと見つめ  
る貴重な体験はあるで宇  
宙を呑みほすかのような  
不思議な感じです。



木村盛康氏の特長になっている窯変（よ  
うへん）は銅、錫、チタン、マンガン、  
コバルト、クロムなどのさまざまなかい石  
による釉薬がの炎によって変化し、焼成  
した陶器に予測のつかない偶然性によつ  
て、妖しい釉色や釉相が表れてくること  
を言います。15世紀頃、わが国の茶人は、  
この瑠璃色に輝く光を「星」または「輝  
く」という意味をもつ「曜」の字を当て、  
曜変と文献に記するようになります。

2014年 9月21日[日]～12月9日[火]

高岡市中山町175 電話 0577-34-6511 FAX 0577-34-6065  
休館日／毎週水曜日  
開館時間／午前10時～午後5時「入館は午後4時まで」  
観覧料／900円[大人] 700円[高・大學生・シルバ] 300円[小・中學生]  
主催／日本伝統芸術文化財団 協力／光ミュージアム  
後援／高岡市



電車 ▶JR高岡駅下車…タクシーで約5分、徒歩  
で40分  
自動車 ▶東海北陸道経由、中部縦貫道【高岡IC】  
から約3分  
▶北陸自動車道【富山IC】からR41で約2時間  
▶長野自動車道【松本IC】からR158で約2時間



光ミュージアム  
HIKARU MUSEUM | 記念館

光ミュージアム 検索  
<http://h-am.jp>  
〒506-0051 岐阜県高岡市中山町175 TEL 0577-34-6511

飛騨高山で魅惑のブルーに出逢ってみませんか？

この人とよくぞ出会えた、と思うことがまれに  
ある。そう思うからには、その人物は自分にとつ  
て少なからず重要な人なのだが、それにもかか  
わらず、出会いと言えば何とも頼りない偶然の  
上に起つていてることにいまさらながら気づく。  
あのとき、事業がうまくいっていたら、二度の  
倒産劇を演じることはなかつただろうし、私は  
丹羽博士と永遠に知り合うことはなかつたであ  
ろう。

思えば人間の出会いとは、ぜんぶがぜんぶ、そ  
うした積み重ねでできている。

70億人の人間の中から、数えきれないほどの奇  
跡のような偶然をのりこえて、私は丹羽博士と  
出会ってしまった。

そしてその人は自分の人生の中で、きわめて大  
切な役割を果たすのである。

（白井常雄談）

人間は健康な時に  
そうじやない自分を  
想像するのが、  
なんて苦手なんだろう。

一年に何度あるかはわからないが、

順調で平穏な日々がつづいていたとする。

そんな毎日、何かひとついやなことが起きる。

(たとえば、病気)

悪いことは重なると言われる通り、このあと、ひとつふたつ  
気持ちが暗くなることが続くと、もうダメ。  
からきし意気地がなくなる。

あんなに盤石に見えていたこの生活に、

確かなものなど何ひとつない気がしてくる。



---

平穏な日々を過ごすために。  
SOD様食品のご提案です。



一般社団法人 丹羽免疫療法振興会  
〒112-0015 東京都文京区目白台 3-4-11GF ビル 2F  
TEL 03-3941-1100 FAX 03-5976-1422